

是川 タ著『ニッポンの移民―増え続ける外国人とどう向き合うか』

ちくま新書（2025年）

日本では外国人が増加している。外国からの移民は、人口減少に伴う労働力不足への対応策などとして注目されることもあれば、地域社会での共生の課題が指摘されるなど、ネガティブなテーマとして取り上げられることもある。本書は、データと理論に基づいて日本における移民の実態を考察しており、将来の展望についても紹介がされている。

本書の内容を簡単に紹介したい。興味深い論点として、アジア諸国の経済発展と移民先としての日本の関係について取り上げられている。アジア諸国の経済発展に伴い、日本が移民先として選択されなくなるという見方は、個人的にもしばしば耳にすることがある。しかし本書では、30年前と比べて日本とアジア諸国との経済格差は縮小しているものの、主に就労を目的に海外から来日し定住する人の数はむしろ増加していることが示されている。

そして、移民先としての日本に関するデータとともに、日本の人気が高いことが紹介されている。アジア域内の国際人口移動（フロー値）をみると、アジアから先進国を目指す移民（年間205万人）のうち、48万人が日本に移住しており、これは第2位の米国（35万人）を上回る最大の受け入れ国であるという。また移住意欲から見た国別のランキングに関するデータも紹介されている。2024年の永住移住を希望する国別のランキングでは、アラブ諸国、米国に次いで日本は第3位に位置付けており、特に東南アジアにおける日本の人気が高いことが示されている。こうした結果は、日本が移民先としての魅力を失いつつあるという印象論を覆すものであり、興味深い考察となっている。

また移民の類型における日本の特徴も興味深い点である。2023年における日本の永住型移民の受け入れ規模は先進国中第10位であり、その順位は近年上昇傾向にあるという。また日本の新規永住型移民の類型を見ると、「労働」が58.2%を占め、これに「帯同家族」を合わせると83.8%に達し、就労が軸となっている点が特徴として示されている。一方、例えばアメリカは「労働」と「帯同家族」を合わせても13.6%にとどまり、「家族」が66.1%を占める。このように日本と欧米諸国では移民の類型が異なる。そのため、欧米諸国が直面するような移民との共生に関する課題を、日本にそのまま当てはめて論じることは難しいことがわかる。

外国からの移民をめぐるのは、感情論や印象論に基づく議論が先行しがちであるように思われる。しかし実際には、経済、政治、文化など多様な要因が複雑に絡み合っており、単純な賛否で割り切ることはできない。本書は、データと理論をもとに移民の実態を描き出している。日本の移民に関する重要な視点や情報を提供してくれるだけでなく、感情や印象ではなくデータや比較に基づいて考察することの重要性を教えてくれる。

（中川敬士）